

手仕事の逸品 熱意で織る

ぴーふる

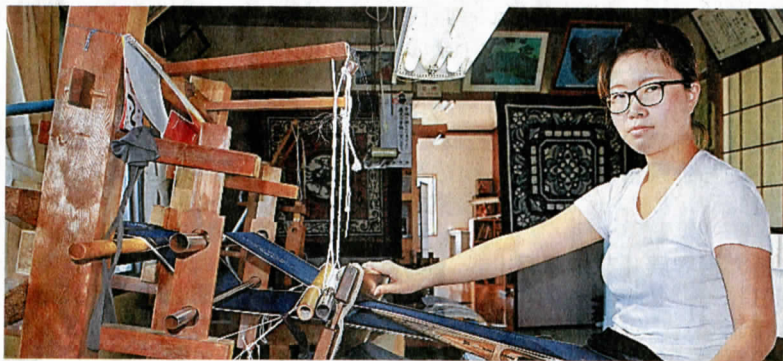
小貫那子さん(32)は、ユネスコ無形文化遺産に登録されている本場結城紬の織り手だ。

東京都の出身。本場結城紬に魅せられ、研修生として県工業技術センター繊維工業指導所で1年間、独特の「地機織り」の技術を学んだ。4月から結城市内の織元の工房で働いている。

結城市出身の祖母から、結城紬の魅力を聞いて育った。都内の美大でデザインを学びながら専門学校に通って染織も勉強した。就職したアパレル会社では女性の靴のデザインを担当。そ

本場結城紬の織り手

おぬき ともこ
小貫 那子さん(32)



の後、出版社でも働いた。
「頭で図案を描くだけでなく

く、体を使って人に長く愛されるモノをつくり出したい」。30歳になったところ、偶然手にした雑誌で、同指導所が織り手の研修生を募集していることを知った。結城紬に賭けてみた。

魅力は、手間と時間をかけた手織りの味わいだ。真綿状の繭から熟練の技術で糸を紡ぐ。図案に基づいて染められた糸を、小貫さんら織り手が、1本のずれもないように神経を集中させて細かな柄を織りあげていく。

「『結城三代』と言われる。祖母、母、娘を通して着られる丈夫さです。心と体が合致した熟練の技が強さと、素晴らしい風合いを生み出します」

織り手として半年以上が過ぎた。早く伝統の文様や斬新な図柄を織れるようになってほしいと思う。「ただ、遠くを見つめるだけでは……。今は1本の糸を織り込む瞬間に集中しています」